

「対面」の全面再開 キャンパスに活気**令和5年度前期を振り返る**

今年度も後期の授業がやがて始まります。授業開始を前に、
渡辺雄一学部長に前期を振り返ってもらいました。

渡辺 雄一 学部長

令和5年度前期には、新型コロナウイルス感染症の5類移行が決まり、対面での活動がほぼ全面的に再開した。学部生401人を含む計448人を迎えた入学式こそ、感染防止のため昨年に引き続き学科ごとに時間差での開催となったが、授業は教養科目を含めほぼ全面的に対面での実施となった。とはいえ、感染症の発生が無くなったわけではないので、学外実習においては、施設側の事情で計画の変更を余儀なくされることは続いた。一方4年ぶりの杏友会歓送迎会を8月に実施。久しぶりにマスクを取った顔を見ながら歓談できる喜びを感じた。

国際交流も4年ぶりに対面で行い、6月にはタイのコンケン大学から、7月には韓国の大邱保健大学から学生を受け入れた。本学からも8月と9月に両大学に学生を派遣した。学生たちも過去3年間活動が制限されてきた反動か、過去最多となる申し込みがあった。過去2年間コロナ禍にあっても何とか交流を継続しようとオンラインによる交流を行ってきた。その成果もあったと思う。実際オンラインで交流に参加した学生の多くが今回の派遣に応募してくれた。

オープンキャンパスも制限を設けず対面で実施し、7月、8月、9月の3回を合わせて過去最多の2150人の来学者があった。これは本学に対する関心の高まりを表しており、今後の入学志願者の増加につながってくれるものと期待している。また、小中学生を対象としたイベント「からだのふしぎ探検in熊本保健科学大学」も大盛況であった。2年目となる今年は、熊本市全域の小中学生を対象としたが、事前申し込みが殺到し、保護者も含め約180人が来場してくれた。医療系の仕事に対する関心を早くから持ってもらうための「種まき」として、これからも続けていきたい。

昨年度、本学は自治体、企業スポーツチーム、その他の団体と包括連携協定を次々と締結した。今年度に入りこれらの協定に基づく活動が本格始動した。例えば、6月14日には阿蘇市と阿蘇中央高校との協定に基づき、同校にて同市民の測定会を実施。熊本県高等学校体育学科・コース連絡協議会との包括連携協定に基づき、5月29日には熊本西高校野球部を対象にデータ収集と説明会、7月7、8日には同校女子柔道部を対象に科学的トレーニング法の指導を行った。また、3年目となる水上村スポーツ合宿アスリート支援も株式会社明治との連携に基づき共同で「合宿めし」の開発が追加された。また、7月11日にはバスケットボールのBリーグ2部熊本ヴォルターズと、プロチームとは初となる包括連携協定を締結し、7月25日には早速身体能力測定会を実施した。これらの活動を通して、学生に実践的な学びの場を提供するとともに、果敢に外に出て、新たな分野に挑戦し、他と連携して社会に貢献する医療系大学として本学の認知度がますます高まっていくことを期待している。



コンケン大学交換研修生のさよならパーティー
で記念写真に納まる関係者



9月期オープンキャンパスで説明を受ける高校生たち



身体能力測定会でレーンアジリティに取り組む熊本ヴォルターズの選手

「オンリーワン」な研究 次々と披露

医学検査学科
卒業研究発表会



医学検査学科の卒業研究発表会で質問に立つ学生と演壇で回答する学生たち

医学検査学科の卒業研究発表会が6日(水)、50周年記念館で開催され、18演題にわたる研究の成果が披露されました。冒頭、竹屋元裕学長が「(卒業後)日々の検査業務の中で疑問が出てくるとは思いますが、そのままにせずリサーチマインドをもって取り組んでほしい」と激励。各演題7分間の持ち時間で発表がありました。各発表後の質疑応答(3分間)では、学生や教員から次々と質問が飛び出し、発表学生たちは堂々と応じていました。

審査の結果、優秀発表賞に計5演題、審査員特別賞に1演題が選ばれました。上仲一義学科長は「内容を聞いているとみなオンリーワンの研究ができていた」と講評しました。(入試・広報課)

受賞演題とテーマ

【優秀発表賞】

「アジュバント評価系の検討と候補物質の予備評価」(上仲SG) / 「生体内における脱シアル化血小板のモニタリング」(上妻SG) / 「超音波Elastographyを用いた腓腹筋の筋硬度測定を検討」(飯伏SG) / 「人工髄液は抗血小板薬存在下でも血小板活性化を増強できる」(上妻SG) / 「学内におけるSARS-CoV-2 RNAのスクリーニング」(正代SG)

【審査員特別賞】

「HIV-1 Gag MAドメインの新たな機能の探索 ~細胞実験条件の検討を中心に~」(安楽SG)

PT4年 前田さん 緊張の学会発表 コ・メディカル形態機能学会

コ・メディカル形態機能学会第21回学術集会・総会が9日(土)山形市のやまぎん県民ホールで開催され、リハビリテーション学科理学療法学専攻4年の前田拓哉さんが「脳損傷モデルマウスの機能回復と自発的運動量との関係」のテーマで発表に立ちました。

これまで、自発的な運動が脳損傷後の機能回復に有効なことは分かっていたのですが、運動のどのような要素が回復に影響するか不明でした。田中貴士講師のゼミで卒業研究に取り組んでいる前田さんは、同じゼミの古木ほたるさん、三次恭平さん、柳田寧々さん(いずれも同専攻4年)とともに研究を始め、機能回復には運動の量が重要なことを明らかにしました。

学会発表を終えた前田さんは「初めての学会発表で緊張や不安が多かったですが、勉強になることも多かったです。また参加して経験を積みたいと思います」と話していました。(入試・広報課)



初めての学会発表に臨んだ前田さん

学生の眼 友達みたいな「先輩」になりたい

2年生になり、「後輩」と呼べる人たちができました。学年が上がるといのは、理屈抜きにうれしいものです。一方で、入りたての1年生から元気な声で「先輩」と呼びかけられると、どこか面はゆい感じがします。

高校時代、私には「こんな先輩になりたいな」と思う人がいました。だから、その先輩を目標にし、後輩からも同じように思ってもらえたらいいなという気持ちでした。実際のところ、自分が後輩から「先輩みたいになりたい」と思われていたのかどうか自信はありません。むしろその逆ではなかったかと、今思えば顔を赤らめ反省することばかりです。



リハビリテーション学科生活機能療法学専攻2年 岡村 真来

でも、高校の部活引退や卒業の時にももらった手紙には、「一緒に部活ができてよかった」「出会えてよかった」と温かい言葉が並んでいました。少しでもそう思ってもらえたことが嬉しかった。私も友達みたいに話しかけてくれる後輩たちが大好きだったし、今も毎日楽しかったことが思い出されます。

大学でも後輩ができました。相変わらず先輩らしいことはできませんが「友達みたいな先輩」になることが私の目標です。

(アカデミックスキル支援センター学生広報スタッフ)

「分野横断してこそ真価発揮」

中村・熊本大大学院特任教授 データサイエンスの実際を説明



熊本大学大学院先端機構フロンティアデータサイエンス化血研寄附講座の中村振一郎特任教授=写真=による学術講演会が14日（木）、1300L講義室で開催されました。共通教育センター数理・データサイエンス・AI教育専門部会主催、学術研究会議、FD委員会共催。

中村特任教授は「データサイエンスという学問 その本質と実際について」と題した講演の中で、「データでものを見ることは、ありのままを見ることにつながる」として、日本の現状やデータサイエンスが出てきた背景な

どに言及。その場の空気で物事を決めようとせずに「データをもって決めること」、「データの背後に何かがあるかを見る」ことの大切さを強調しました。

また、「一つの専門だけでは大きな目的には到達できない。データサイエンスは、分野横断してこそ真価が発揮できます」と締めくくりました。中村特任教授の熱意とユーモアに満ちた語り口で、会場は終始笑いが絶えませんでした。

（入試・広報課）

ワールドアスリート事業

有望5選手の身体能力測定

熊本県教育委員会の事業であるワールドアスリートのフィットネスチェックが4日（月）、本学アリーナであり、健康・スポーツ教育研究センターのスタッフ6人が、将来オリンピックなど国際舞台での活躍が期待される高校・大学生アスリートの各種能力を測定しました。

同委員会が指定する育成指定選手の身体機能やメンタルを科学的に把握し、今後のトレーニング計画に役立ててもらうのが目的です。今回は、陸上競技、レスリング、漕艇の3競技から計5人が参加。8月に北海道で開催された全国高校総体陸上で女子100㍍と同200㍍の2冠に輝いた山形愛羽選手（熊本中央高3年）も名前を連ねました。

選手たちは、同センター備え付けの最新の機器などを使い、身体組成、形態測定、筋パワー、スプリント能力など計15種目の測定に臨みました。測定結果は約2週間後を目途に本人に郵送される予定です。（入試・広報課）



パワーマックスに取り組みレスリング競技の大野真子選手（中央左）と久保下亮准教授（左）

国からの感謝状を受け取る竹屋学長（右）



長年の献血協力国から感謝状

令和5年度献血運動推進全国大会厚生労働大臣表彰状と感謝状の伝達式が12日（火）、熊本県赤十字血液センターであり、本学を代表して竹屋元裕学長が感謝状を受け取りました。

表彰状、感謝状とも、献血の推進に関する実績が特に優秀で、他の模範になると認められ、過去に献血運動に関する知事の感謝状を受けたことがある団体又は個人に贈呈されるものです。今年度は1団体に表彰状、6団体に感謝状が贈られました。本学はこれまで50年に渡って献血を受け入れてきました。現在は学友会が主体となり、年2回、学内で献血を行っています。

（入試・広報課）